

# 原発対策委員会新聞

社民党福島県  
連合原発対策  
委員会

発行責任者  
小川右善

## 避難区域・広野、楢葉、富岡を視察

# 幾度となく味わう重い気分

### 目に見えない恐怖体験



現地福島視察が相次いでいます。今回は、JP労組大阪の有志が訪れました。

二十一日、前日の豪雨が嘘のような秋晴れに恵まれ、楢葉町町会議員・猪狩守氏の案内の下、避難地域（広野町・楢葉町・富岡町）を訪れました。

広野町では、被災宅を訪れ話を聞きました。新潟・柏崎市の娘さん宅に避難していましたが、いたたまれずに古里に戻ってきたとのこと。二十三日三十キロ圏内の行政のあり方、除染、廃棄物処理の現状、町民の帰還の推移、事故処理・徐染にあたる作業員の居住状況などを説明に、皆真剣にメモをとっていました。実際にはかった線量と隔たりがあるモニタリングの数値に疑問を投げかけ、中間貯蔵施設の双葉郡設置に苦悩する古市氏、もとより反対であった原発に終始熱く怒りを込めた説明に聞き入るばかりでした。

その後は、広野町廃棄物処分場、収束・廃炉作業員の拠点となっているJヴィレジウ楢葉町の仮置場そして、かつては憩

いの場であった天神岬からみる津波被害の光景、さらに北に進み、中間貯蔵施設の予定地を通り、富岡町へと、手付かずの富岡町は荒れ放題、セイタカアワダチソウが田畑一面を黄色で被い雑草が生い茂っています。

津波で破壊された富岡駅は当時の原型をそのままにして朽ち果て、周りの商店街・住宅街も同様に無残な状態を曝け出していました。夜ノ森の桜並木は、葉でアーケードを作る先に居住困難地域を示すバリケードがあります。また、太平洋を一望できる小良浜から第二原発が見える景観は、なんとも言いがたい異様な景

観の中に取りました。急ぎ足の視察を終え、視察者に初めて訪れた感想を述べていただきました。

### 日常気づく異常な生活

風化がすすんでいると言う。たしかに日常生活が戻ったかのように見える。三・一一大震災・原発事故がまるでなかった

かのような風潮もある。しかしそうだろうか？ 徐染作業員が街中で見かける。徐染作業中の立て看板が

十九日、大阪でシンポジウムがあり、フクシマの報告を兼ねて参加をしました。シンポジウムは、半世紀に渡る非核運動を総括し、フクシマ以降の核時代を終わりにする目的で科学技術問題研究会（稲岡宏蔵氏）が開いたものである。報告討論のまとめは、①核と人類は共存できないは、原水禁運動の原点であり時代認識であること。②労働者に依拠



した原水禁運動の強化。③ヒロシマ・ナガサキ・フクシマを結び共通認識を④政策転換を実践の中から脱原発をはかる検討・議論を福島からは、國分俊樹（金和フौरラム）も参加しました。原水禁運動の歴史を学ぶ機会を得ることができました。

ある。仮設住宅が街中の一面を占めている。家中に線量計が放置、思春期を迎えた娘との会話、子どもを拾ってきたどんぐりに引きつる母親、孫を散歩に連れ出すことも自家栽培の果物も食べることが出来ない暮らし。なにげない日常生活で気づく異常な生活が、この先もこの

か？ 先もつづくのだろうか？

